

長岡開府400年

vol.10

ROOTS

400



<特集>

互尊思想

長岡市民が創造した世界観



発刊趣旨
英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。
また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、
開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



東から北
現在のセブンイレブン表町店の斜向かい角地にあった大正5年(1916)10月15日竣工の六十九銀行(北越銀行の前身)の本店。その奥と同じく大正5年12月竣工のレンガ造りの長岡郵便局。東山も現在と同じ稜線である。北に向って伸びる本町通り、奥には中島製油所の煤煙(ばいじん)が見える。手前の角には谷秀商店(ポンプ屋)。当時、渡里町魚仁の西隣にあった劇場(映画館)「長岡座」の昇り旗が手前中央に立っている。

南から東
長岡銀行の屋根の上に設けられた展望台手すりに「長岡」の裏文字が見える。本町通りの屋並みの奥にある森は平潟神社。左奥には、現在の長岡商工会議所の位置にあった北越新報社(新潟日報の前身のひとつ)。その隣に足場を組んで建設中の長岡市役所、その右には明治44年(1911)に現在の大手通に建てられたモダンな長岡病院(長岡赤十字病院の前身)が見える。東山には鋸山が長岡のまちを見おろしている。



当時の本町通り
右の建物が撮影した長岡銀行(屋根の展望台)

長岡市全景「越佐新報社製」大正時代の頃
長岡の本町通り・現在の本町2丁目交差点付近にあった「長岡銀行」屋根上の展望台から撮影され、南から北への眺望を4枚の180度パノラマ絵葉書に納めている。
現在の長岡商工会議所の位置にあった北越新報社(新潟日報の前身のひとつ)。その隣に足場を組んで建設中の長岡市役所が見えることで、大正9年(1920)頃の写真であることがうかがえる。大坂屋書店所蔵。



表紙の銅像は、長岡市立中央図書館互尊文庫前庭に建つ互尊翁像。安岡正篤さんの選文が碑陰にある。

野本恭八郎(のもと・きょうはちろう 1852~1936)
長岡市の商人。嘉永5年(1852)、上山藩領刈羽郡横沢村(現長岡市小国町横沢)の庄屋・山口家に生まれる。兄は実業家・政治家の山口権三郎。私塾三余堂、上山藩校明新館支館に学ぶ。20歳の時、渡里町の商人・野本家の養子となる。長岡町会副議長、新潟県会議員、六十九銀行取締役、長岡町学務委員などを歴任。大正7年(1918)、長岡市に大正記念長岡市立互尊文庫を寄附。互尊思想を唱え、昭和9年(1934)に日本互尊社を創立した。昭和11年死去。「互尊翁」と呼ばれ、人びとの尊敬を集めた野本の肖像画は、画家・高村真夫が描き、長岡空襲で焼失した互尊文庫の復興開館式(昭和23年)で掲げられた。

巻頭言

私たちの開府四百年、ルーツの旅はこの十号で、ひとまず、ひと区切りを迎えました。もう、ご承知のことと思いますがこの小誌は、長岡の歴史が持ち続けてきた市民の精神史を解析してきました。言い様をかえれば、精神史というよりも長岡とその周辺の風土で生き続けてきた人間の歴史といっても良いと思います。そこには激動の時代を生き抜く人間力がありました。決して、額面通りだけではない不死鳥の不屈の魂が私たちを護ってくれたと思っています。さて、長岡市民の精神史とは何でしょう。四百年の彼方から受け継いできた常在戦場の精神が米百俵の心を生み、そして近代の開府三百年の前後に世界を救おうとする互尊思想を啓くに至りました。そのことを長岡市民、一人一人が誇りに思いそして、次なる百年に向け新しい米百俵の実績を積み上げようではありませんか。

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 磯田達伸

世界・人類を救う 野本互尊翁

(イメージ図)



自分の幸せと
他人の幸せ

人類の平和

一人一人が
幸せになる

時代の風に乗じて

英雄になる者を風雲児という。

穏やかな生活のなかにも

新しい思想を興して

人の歴史を変えてゆくものを哲人という。

長岡商人、野本恭八郎(号・互尊翁)は

天下国家が仰天した互尊思想を

創始して、当時の長岡商人たちに

新境地を与えてくれた。

その志の原点に、長岡の近代商工業の

発達がある。

そもそも、互尊翁が互尊思想を唱えたのは

いまから百年くらい前のことだ。

明治維新後、日本近代化のひずみは

物の価値観までもゆがませ

格差が広がっていた。

旧身分でさえ復活しかねない風潮のなかで

市民協働の長岡大合併の推進役や

工業都市の形成に尽力した。

そして、何よりも文化都市の形成が

市民生活の向上につながると率先して

新生活運動に邁進した。

図書館が市民の人間形成に

おおきな役割を果たすと確信し

私財を投げうって互尊文庫を寄附している。

彼の唱えた互尊独尊の思想は

世界・人類が悩み抜いている

平和の根源を解決してくれるものだ。

今も、その伝説的聖地がある。

日本互尊社である。

その最大にして、最良の世界観の発祥地が

長岡であることを誇りに思う。

長岡開府四百年。万歳。

長岡万歳

互尊翁は万歳を協同一致の礼儀と

考えていたらしい。

式典などの際の野本恭八郎は

足のつま先まで立って

精一杯の声を張り上げて

勢いよく両手を天に突きあげる。

その見事な様子が見たくて

商人仲間は集会の終わりに

野本恭八郎を万歳係にした。

野本にとつては

万歳は人生哲学の一端であり

終結の象徴だという。

万歳を堂々とする互尊翁からは

不思議な魅力が醸された。

互尊思想とは

長岡商人から生まれた思想
共存共栄を第一義とし
理想の商工業都市をめざす
文化がまちを造りあげ
人は心豊かな生活を
送ることができる



日本互尊社・樺心軒の襖絵 水島爾保布画「富士山図」 互尊翁は「富士山は地霊の表象たる天岳」と表現した。

世界平和の願い

長岡商人、野本恭八郎は不思議な人だ。おおよそ利益を追求する商人とは、まるで違った価値観を構想してゆくめづらしい人間だった。

彼が生きた明治・大正・昭和初期は近代日本の激動の時代だった。その渦中であつて、一人の人間として生きる価値を問ひ、社会とともに共生をしたいという希求が、偉大な互尊思想を生むことになる。あえて、互尊思想を表現したが、野本恭八郎が広めようとしたみずからの生き様についての考え方、生き方は、その後長岡の人びとに有形・無形の影響を与えている。

互尊思想の一番の目的は「世界平和」である。人類に博愛をもたらし、互いに個性を認めあい、あらゆる人びとが幸せに過ごせる世界を造りあげることであつた。

大仰ない方が許されれば、「人間が人間として生命を全うする喜びを、人類で共有しよう」という思想にいきあたえる作用も働き、なかば哲学的で倫理的でもある。

恭八郎は商人だったが、儒教の基本を両親や儒学者に教えてもらい、仏教に帰



水島爾保布画「刈羽郡小国村 互尊翁生家山口家」の長屋門

館支館でとっぷりと儒教を親しんでいた。師の朴斎は恭儉にこだわった人物だ。恭八郎は、そんな師に学ぶとともに民間の教科書ともいふべき『実語教』の「山高きゆえに貴からず、樹有るを以て貴しとす」の人生訓に感動する。

「実存とは何であろう」という疑問。そして、生命の不可思議から芽生えた己の自我が課題となつた。

さて、その恭八郎が二十歳の明治五年、長岡商人の野本家に養子に入った。

当時の旧長岡城下は戦争の惨禍からの復興という課題を抱えていた。士族と商人は互いにいがみ合い、まちの発展を阻んでいた。

独尊から互尊へ

「自己の存在を余りに主張する時には、かえって他人を無視する。元来、人間は同じ人間であれば、同等の価値がある者であり、自己を尊敬すべきであると共に、他人をも尊敬すべきである」

四十歳の頃の野本恭八郎の感慨である。長岡商人として、士族、農民、商人の間で身分差に苦しんだ。そして何よりも他領（封建制）の違いにより生活文化も違い、価値観の違いが良心を苦しめることになる。

そんななかで野本恭八郎は、すすんで別の社会と関わろうとし、第六十九国立銀行の取締役になったり新潟県会議員にもなつたりした。

そんななかで、みずからの法名を「大

依し、キリスト教などにも興味をもつた。しかし、聖人とはならず、あくまで「長岡市民として、市民の幸福を願う慈善家としての顔を保ち続けた稀有の人物である。

自我にめざめる

新潟県長岡市小国町横沢。そこは、いまも越後らしい原風景が残っているところだ。そこで嘉永五年（一八五二）に恭八郎は生まれている。

父は山口平三郎。母はとせ。山口家は上山藩の大庄屋格の豪農。兄はのちに日本石油会社などを興す権三郎などの兄弟がいた。

幼い頃は越後の二大私塾のひとつ三余堂の相沢朴斎に学び、上山藩の藩校明新

勝院互尊独士三貴妙位」と名づけた。互尊独士がのちの互尊独尊であることはいうまでもない。三貴は、儒教のいう「仁・勇・智」の貴さで、「仁、深きがゆえに貴からず 互尊を以て貴しと為す。勇、強きがゆえに貴からず 共成を以て貴しと為す。智、広きがゆえに貴からず 独尊を以て貴しと為す」（互尊翁説）にながつてゆく。それを三貴と呼んだ恭八郎には、人間とは何か。人間の摂理とは何かが大きな命題になつた。

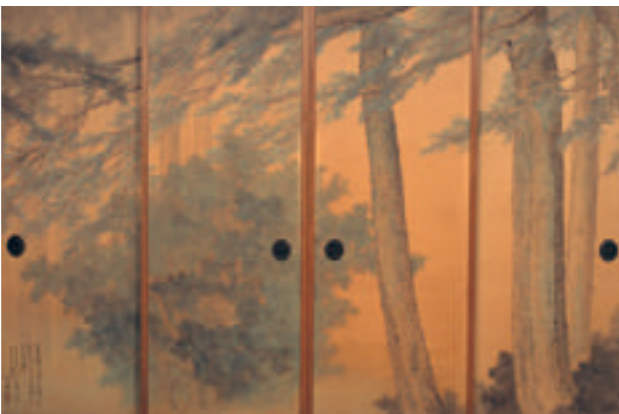
宇宙にたつた一つしかない個人の生命体は尊いものである。それを独尊という。そうすれば、おのれの存在を主張する独尊が、他人を無視することはできない。人間は同じ人間であれば同等の価値がある者であり、自己を尊敬すべきであるとともに、他人をも尊敬することになる。それが互尊独尊の境地に達する。

西洋の哲学者カントのいう「自敬、他敬」の説が独尊、互尊ということになる。

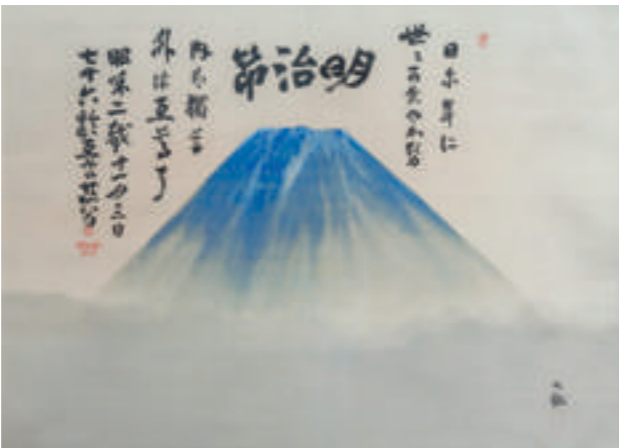
人類・普遍の世界観

互尊思想は、一長岡市民が創造した思想である。他を尊んで、みずからの人間性を高めてゆく作用を持つという特徴を持つものだ。人は儒教のいう孟子の性善説をとり、努力すれば良知に至る。その主張をしたからこそ「互尊翁」と称されるに至つた。

「宇宙は独尊の道場なり、互尊は万有の活動なり」と唱えた世界観は、無限の人類の幸福を約束させてくれる福音だ。



襖絵 水島爾保布画「杉に松樺と共に我れ人の 身と心との鏡となりて」



横山大観画「富士山の絵」
横山大観が描いた青富士に明治節と大書し、脇に「日に年に世にかがやかせ、内は独尊 外は互尊に」と記した。昭和2年は明治節（のち文化の日）が制定された。



互尊止戈（ごそんしほ）
八十一之秋とあるから昭和7年頃の書。日本が戦争に巻きこまれてゆくことを憂いたものか。

その原点は至誠と行動の商人



水島爾保布画「互尊翁出生地 小国郷中央部 山口家門前より展望」

小国の郷から動乱の長岡へ

明治五年（一八七二）八月、二十歳の山口恭八郎は長岡町人野本家の養子に入った。当時の野本家の商売は不動産業と貸金業。一家の主人は養祖母のひで、それに妻となる長女りいとその妹りつという女性だけの家族構成であった。長岡は、維新後の動乱が残るなか、士族と町人、老舗の旦那と新興の商人など、分け隔てる見えない壁があった。新時代を迎えたものの、長く続いた封建社会の名残りは、共通の価値観を見いだせずしばしば対立を生んでいた。小国から出て来た「入り婿」野本恭八郎は、今までの人生とは全く違う環境で商人としての道を歩み始める。

誠は天の道なり

明治十三年（一八八〇）、恭八郎が自らを律する誓文をしたためたこの年、恭八郎と実兄山口権三郎は、商工人の集まり「誠之社」を設立した。名前の由来は中庸の「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」。誠を大義とした商工人の集まりであった。同年十二月十五日夜、第六十九国立銀行で行われた設立総会は一瞬緊張感が張りつめた。設立大意に「貨幣の流出を抑えるために外国品の輸入を抑えて、国産品を製造し輸出を奨励する」という宣言の一部分に、輸入物を扱う唐物商の岸宇吉が激しく反論した。恭八郎は、長岡商人代表格の岸に対して自らの商売だけでなく、どうしたら自国の産業が盛んになるかを考えるべきかを主張し、交通機関の発達、特に鉄道の誘致を提案した。この提案に対し岸は素直に賛意を示し、長岡における殖産興業の可能性について真剣に検討を始める。誠之社は権三郎をはじめ、西脇国三郎などの近郊地主も名を連ね、同社を通じて長岡へ参画するきっかけとなった。このことは、その後の近代都市への発展を資本面で後押しする。

三夜会での有考の説

明治二十年頃になると、士族の取りまとめ役、三島億二郎は北海道開拓に傾注し、若手商人のリーダーであった大橋佐平は拠点を東京に移した。抛り所を失い閉塞感が漂う地方都市、ある商人はこの頃を「惰力に任せていられる現状維持とも言わべき趨勢であった」と語っている。

明治二十年（一八八七）七月、経済研究団体である三夜会で恭八郎は「有考の説」と題して「これからは自らの考え無しであってはならない」、「考えるだけでなくお互い実践しなければならぬ」と演説した。

多くを学んだ諸先輩の志を受け継ぐ恭八郎の演説に、広井一や渡辺藤吉などの若手経済人は共感し、その後の発展期をリードしていった。

自身が前面に立つことは少なかったが、恭八郎は長岡経済界に共存共栄の道を示す大きな役割を担っていた。

清脩自守

山本五十六は、互尊翁の格言「清脩自守」を揮毫した際、自署の前に「後進」と記して師と仰いだ互尊翁を思慕した。

言行録

日本の歴史、万国の歴史を知らずして、人類の発展・発達は無い。およそ実業界に立つものは人間の歴史を知らねばなりません。

自我に覚醒したものが、己を知ろうとする。その学問に歴史学がある。人間とは何者か。日本人の根源の「ルーツ」を知ること、商工業（実業）に従事する価値を知る。また互尊翁は「良き実業人には識見が大切です」とも述べている。

合併はひとり、長岡町のためだけではない。また、ほかのためばかりでもない。共同一致の団体をつくることは人間界のためである。

士族の長岡本町と商人の長岡町、それに周辺の村々が合併できないでいたころ。商工業の発展・発達のために「共同一致」を人びとに説いた。

独尊を知ってこそ互尊がある。互尊が広まれば、おのずから徳風が社会に吹く。

独尊とは自分自身の特性（特質）を知り、みずから大切に生き抜く知性を養うことであり、他と交わるに互いの個性を認め合うことである。そうすれば、互尊翁が説く「互尊止戈」の世界となり、戦争もなくなる。

小があるから大がある。

「大を生かすには小が必要である」ともいう。大きな部屋の脇に小さな部屋が野本邸にはあり、調整機能を果たしていた。

ありがたやありがたや 日々おもしろく はたらかん 人はたがいに尊みあいて
あさ起きて心の帯を締め直し 日に若がり 世をば あらたに
あめつちの 妙なる恵み うけつぎて 世の為つくす 人を尊き

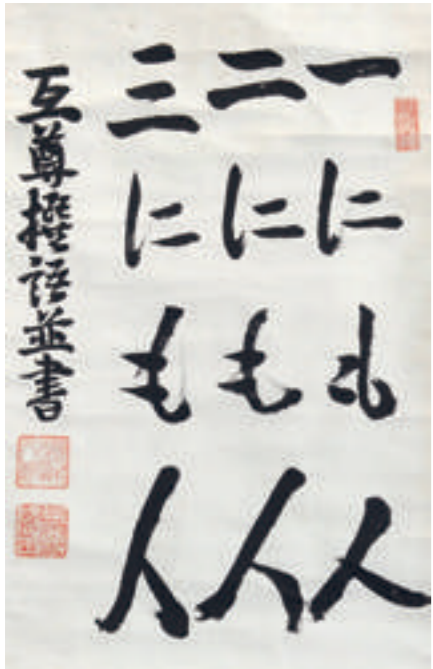
独尊の境地に達することはむずかしいが、心意気をはつらつとすこそ

とすれば、自分の尊さにきづくものである。

図書館を以て、我が宝と仰ぎ 人生の記念たる思想界の博覧会と知れ
図書館を以て、我が宝と仰ぎ 世に立つ活人中心の自発機関と知れ
図書館を以て、我が宝と仰ぎ 活新味の読書と研究の社会道場と知れ
図書館「互尊文庫」の入口に掲げられていた。



水島爾保布画「互尊文庫創立」



野本互尊翁の書 人間を中心に物事を考える。互尊翁は三の数字にこだわり、そこに思想発場の原点をおいたといわれている。



長羽織を着した互尊翁（『互尊翁』より）



誓文



日本互尊社如是蔵博物館に展示されている互尊翁の胸像

互尊思想の結晶 互尊文庫



大正記念長岡市立互尊文庫

本館は木造二階建てで、一階には事務室、児童閲覧室などがあり、書庫は耐火性の高いれんが造りの三階建て。当時としてはモダンな建築物ができた。

互尊翁は内省の人である。互尊思想を創りあげたとしても、市民にその思想を押しつけるようなことはしなかった。

図書館の互尊文庫を設立することによって、市民に自覚させようとしたのである。もとより、当時、日本の政治は日本の富強をめざしており、軍事力の増強が一番の課題であった。しかし、野本は軍事力が第一ではなく、日本の商工業の発展発達が第一義だと考えていた。

それはとりもなおさず、国民一人ひとりが自己の責任のなかで、商工業の発達に尽力することにあると野本は主張しはじめた。その基本は「今日一日、ありがたく、おもしろく、はたらきて、(中略)感謝する心だ」という。

その結晶が図書館であると互尊翁。教養と教育。それも実業の教育こそ、まず郷土発展の最善の道であると構想し、そこに互尊思想を入れ「互尊文庫」としようとした。

互尊文庫の設立

大正四年(一九一五)五月、互尊翁は大正天皇即位の大礼を祝う記念事業として、互尊文庫を寄附しその経営も長岡市に任せたいと市長に申し入れた。市側の賛同をあらかじめ得た互尊翁は同年十月十一日「大正記念互尊文庫創設費・維持費寄附及経営願」を長岡市に提出した。

互尊文庫は現在の長岡グランドホテル付近に建設された。この場所は長岡藩時代には御会所(役所)のあった場所、三島徳二郎の旧居を鋳業家風間退三氏が所有していたところを買収取った。庭園には樹木があり、多くの緑に囲まれていた。

活新味の三読法

活新味というのは互尊翁が提唱した読書の方法である。

新説はその時代の新鮮味のある読書に触れること。そしてその新鮮な本の学びを自分だけでなく、周囲にも伝えること。

味読は味わいながら読むこと。一般に言われる精読よりもさらに深く、著者の背景も加味して読書をする。

活読は読んだものを活かすこと。読書によって修養し行きつく先は活用であると互尊翁は言った。

日本互尊社の設立

日本互尊社は昭和九年に互尊翁が全財産を投じて設立した。互尊文庫が互尊独尊の精神を知るための道場とすれば、日本互尊社は互尊思想を守り広める機関である。

昭和八年に大病を患った互尊翁は夫人との相談の結果、決意を固めた。六人の子を失った夫妻は家の断絶が天命と考へ、全財産を日本互尊社の設立に投ずる表明をした。齢八十歳を超え、この世に何を残すべきか悩んだ末の決断であった。残念なこと互尊翁の互尊思想の現において支え続けたい夫人は、その設立を見ぬまま病でこの世を去った。現在の日本互尊社は公益財団法人と



水島爾保布画「雪の日本互尊社」訪問者を出迎える互尊翁。門前の石碑は昭和15年6月8日除幕の互尊翁の頌徳碑。題額は山本五十六。

ないもので、学生や社会人、子どもたちの教養本の収集につとめている。特に郷土資料の収集に力を入れ、古文書にも関心を喚起させるようにした。自尊の精神はふるさとの歴史を知ることからという互尊翁の主張が背景にあった。開館時間を夜間、休日に延長し、社会人学習をすすめ、多くの人材を輩出した。

図書館を寄附したのではない

「わたしは図書館を寄附したのではない、互尊文庫を寄附したのである」という互尊翁の言葉が伝わっている。



大正記念長岡市立互尊文庫の庭園 柏崎市立図書館所蔵

大正七年六月八日に開館式をとりおこなった。今まで市内にあった私立図書館で閲覧人数が一万人を超えたことはなかったが、文庫が開館した大正七年には五万人を超えた。大正十年の統計「全国図書館に関する調査」によると、互尊文庫のおよそ三万六千冊の蔵書は全国の郡市町村立図書館の中で第三位に数えられた。開館以来利用者は年々増加し、学生、教員、実業家、あらゆる人びとが互尊文庫で学び、講演会なども開かれて文化活動の一翼を担った。

互尊文庫に行くことは、長岡市民のステータスとなっていた。子ども、高齢者、学生、産業者、女性たちが学習だけでなく、みずからの人生を楽しみ、有意義に過ごすために互尊文庫に通った。そこに行きさえすれば、何か目標がつかめる希望が生まれた。談話室のようなものまであり、長岡の産業界の経営者が集って、偶然の話し合いが、長岡の商工業に新しい力を与えてくれた。同時に、市外からの訪問者がふえて、大きな商圏が広がっていった。開府三百年祭後のまちを大きくする機運も高まって、知の創造が長岡の商工業の発達に役立った。

互尊思想の結晶

互尊翁は互尊思想の修養の場として図書館が一番ふさわしいという考えをもっていた。世の中の人びとに翁の互尊思想を広げるにはどのようにしたらよいか考えた結果が図書館の設立につながった。互尊文庫の設立は互尊翁が理想とする社会を実現するための一端であった。

蔵書に特徴

市民が購入できないような貴重な図書を集め、法律・経営・工学など長岡市の産業界のためになるような図書を購入した。娯楽書は排除しなかったが、ごく少

なっていた。設立当時と変わらぬ敷地内には石造りの如是蔵博物館がある。長岡空襲にも耐えたこの建物の館内では互尊翁の遺品とともに、長岡の先人の歴史資料を数多く公開している。広い庭園の中では互尊翁が好んだ櫻の木が根を張り、緑陰を濃くうつつしている。

未来のための図書館へ

互尊翁が目指した互尊文庫は自らの人生を明るく切り開く人間を育てることにあった。いわば人づくりの図書館であった。大正記念互尊文庫ができたことで当時の長岡は社会教育の先進地となり、長岡らしい近代文化を形づくっていった。互尊文庫の系譜を引き継ぐ図書館は、これからも人づくりに一役を担う。

長岡市民になったお殿様

No.10

牧野家第十七代当主牧野忠昌氏寄稿

長岡藩主第十二代忠訓公、十三代忠毅公

第十二代忠訓公は丹後国宮津藩主本莊宗秀の第二子として天保十五年（一八四四）江戸で生まれ、十五歳の時牧野家十一代忠基公の養子となった。忠訓公の生母と十代忠雅公の正室はともに小田原藩主大久保忠真公の娘で姉妹である。後に忠基公の二女舞姫と結婚し、慶応三年（一八六七）牧野家の家督を継いだ。翌年一月に鳥羽・伏見の戦いが起こり、五月には北越戊辰戦争に突入した。長岡から会津、米沢、仙台へと難を避け、米沢の新政府軍総督府に降伏状を提出し謹慎した。その後、忠訓公は東京にあった分家笠間藩邸で謹慎し、藩主の籍を解



第12代 牧野忠訓

かれた。明治二年（一八六九）謹慎が許され、長岡に戻るが明治八年（一八七五）三十二歳で亡くなった。

第十三代忠毅公は十一代忠基公の第四子で安政六年（一八五九）に生まれ鋭橋と名乗った。北越戊辰戦争後、父の十一代忠基公とともに仙台で謹慎生活を送っていたが、十月二十八日新政府から長岡に戻って謹慎するように通達があり、十一月七日忠基公や家臣たちと仙台を出発、十一月二十二日見附に到着、翌日稲吉村の普濟寺に到着し、二十八日から善照寺で謹慎生活に入った。この年十歳の鋭橋は兄の後を受け十三代忠毅となった。北越戊辰戦争後の石高は約三分の一に減らされたが長岡藩は残った。お取り潰しではなかったので、家督相続御札を



第13代 牧野忠毅

新政府側に申し述べるため、翌明治二年一月、忠毅は東京に向けて出発した。その直前、忠毅は「行きたくない」と駄々をこねたが父や姉達に説得されたそうである。大正七年六十歳で亡くなった。互尊文庫では、牧野家の一員が仕事をしてきたこともあると聞いている。

牧野忠篤牧野家第十五代当主

祖父忠篤は第十一代忠基公の第六子として明治三年（一八七〇）東京で生まれ、明治十一年（一八七八）九歳で家督を相続した。母勝子とお手伝いの三人で質素な生活を過ごし学習院高等科を卒業、慶應義塾では寄宿舎生活を送り、二十七歳で貴族院議員となり、(財)長岡社理事長、大日本蚕糸会会頭、帝国農会会長、日本石油(株) 監査役など数々の要職について



悠久山房で寛く牧野忠篤(『子爵牧野忠篤伝』より)

た。明治三十九年（一九〇六）には長岡市長に就任、大正六年（一九一七）長岡開府三百年祭では総裁を務めた。普段の生活は東京であったが、長岡に帰った時には、江戸時代藩主専用の菜園があった千歳荘の屋敷で過ごし悠久山の蒼柴神社参拝の折には必ず悠久山房(忠篤命名)に立ち寄り小憩した。また、東京や地方から名士や知人の来岡の際には必ずこの山房に招待してもなした。この山房は、焼夷弾の被災により現存していない。

趣味は多才で、写真、尺八、書画骨董の収集、書道、釣り、篆刻印章、盆石、芸術家との交流、茶道の他に日置流の弓術皆伝免許を取得しており、京都三十三間堂の通し矢に出場し好成績を修めたこともある。

長岡開府四百年記念事業 次の百年へ新しい米百俵



歴史や文化を見つめなおし 未来に活かす

今年が開府四百年です。戦国武将の牧野氏が入封して、いままで息づいてきていた城下町に常在戦場の精神を根づかせています。サムライも農民も商人たちも、その価値観で生活を創造してくらしてきたといえましょう。江戸期における長岡の城下町のイノベーションも、常在戦場の精神から生まれてきたといっても過言でないと思います。

そして、人づくり教育の米百俵の精神や互尊思想は、戦災や天災を乗り越えてきた、長岡の人びとの心の糧となってきました。近隣の市町村と合併をくりかえし、地域の宝が長岡に入ってくるたびに、長岡の文化性が高まっています。異なった個性が交じり合い新しい共生が始まります。矛盾を同居させた文化は、多様性を生んでいます。

このように新しい市民力を創り出してきた長岡の人びとの本当の姿を、二〇一八年に長岡に住む人びとは知って誇りに思うことが大切です。それが私たちのふるさとを創ってきた人びとの祖霊に対する感謝の気持ちだと思います。



長岡市長 磯田達伸

技術革新が急速に進展する現在、世の中の何が変化しているのか、どのように変わっていくのか、私たちがしっかりと把握しながら、この変化に対応していく必要があります。

米百俵の精神が息づく長岡として、次の百年を作り出す人材と産業を育成することも、将来のための投資を「新しい米百俵」として積極的に行ってまいります。未来を切り開く若者たちとそれを支えてくれる市民の皆様の勇気と知恵をもって、次の百年に向けて新しいスタートをきりましょう。

長岡開府四百年記念式典開催

次の百年へ！平成三十年五月に長岡開府四百年記念式典を開催しました。未来を担う若者によるステージや歴史・文化に触れる催しなど、約二万人の来場者がお祝いを楽しみました。



記念式典オープニングは悠久太鼓華童会の迫力ある演奏



市内高校生の書道パフォーマンス 未来へのメッセージが大勢の観客を魅了しました。



長岡人に受け継がれてきた米百俵の精神は私たちの誇りです。先人たちの想いを胸に、輝く未来を創っていきます。一市内小学生 160 人による歌とメッセージの発表



京都の蹴鞠保存会による蹴鞠(けまり)の披露



錦鯉展示や長岡地酒屋台、闘牛ふれあいなどで長岡の魅力を発信



記念の華展や茶席などで400年をお祝い

開府四百年のあゆみ

No.10

いまから七十年前、空襲で焼失した互尊文庫が
明治公園内に再建された

復興開館にかける思い

昭和二十三年（一九四八）十一月、市立互尊文庫が明治公園内に復興開館した。昭和二十年八月一日の長岡空襲で蔵書とともに焼失した互尊文庫が移転、木造で再建されたのである。

復興開館の恩人は、市内で繊維商を営む内藤伝吉である。内藤は、



にぎわう復興開館後の互尊文庫
明治公園内に木造2階建てで移転・新築された互尊文庫の一般閲覧室は、大勢の市民に利用にされ、満席が続いた。

野本互尊翁の故事にならい、多額の
新築・移転費用を長岡市に寄付。

十一月十五日の開館式には、内藤も家族とともに列席し、感謝状を贈呈され、肖像画は互尊翁と並んで掲額された。長岡の図書館活動にまた一人の恩人が加わったのである。

互尊文庫の職員は、復興開館当日の日記に「地下に眠る創設者野本互尊翁も満足の事と思はる」と記した。創立の理念の継承と、復興開館の日を迎えた安堵の思いがにじみ出る文面である。

昭和四十二年に木造の互尊文庫は鉄筋に新築され、昭和六十二年には、長岡市立中央図書館が開館する。

野本恭八郎と内藤伝吉、そして、復興開館に関わった大勢の市民や県内の図書館職員をはじめとする先人たちの思いは、今年百周年を迎えた長岡の図書館に今も引き継がれている。



再建された木造の互尊文庫
昭和23年（1948）に復興開館を迎えた互尊文庫を背景に撮影された関係者の記念写真。前列左から2人目は松田弘俊第9代長岡市長。



互尊文庫の正面玄関



現在の互尊文庫
昭和42年（1967）、市制60周年記念事業として鉄筋コンクリート3階建てで新築された現在の互尊文庫。昭和62年に開館した長岡市立中央図書館の地域館として、明治公園内の互尊翁銅像とともに今も市民から親しまれている。



内藤伝吉肖像画
長岡ゆかりの洋画家・高村真夫が描き、再建された互尊文庫の開館式で掲げられた肖像画。内藤伝吉（1876～1954）は、菓子商大和屋（柳原町）に生まれ、繊維商内藤家の養子となった。多額の金員や蓄音機などを寄附し、互尊文庫の復興に大きな貢献を果たした。

千也がゆく

長岡藩
ゆかりの地を
巡る探訪記
第10回
京都編

長岡志士が残した現代長岡

後世に残した長岡魂をつなぐために…
長岡には市民が楽しみにする三大祭り、長岡まつり、雪しか祭り、米百俵まつりがある。米百俵まつりは時代行列や子ども米百俵劇など城下町ならではの賑わいの日になる。その中に私が参加している江戸幕府輸送艦順動丸隊がある。

順動丸隊とは坂本龍馬や白峰駿馬や勝海舟がいるが長岡と何の繋がりもないと思っっている方も多だろう。龍馬は土佐（高知県）出身で海援隊や亀山社中の設立をした人物。駿馬は長岡出身の武士で、龍馬と初めて出会った場所こそが順動丸船上という。海軍操練所で勝の弟子となるが、操練所閉鎖後は勝の勧めで龍馬の元に行き海援隊に入る。のちに白峰造船所を開き日本人初の洋式造船を建設した人物だ。

勝は龍馬や幕末の志士達を乗せていた順動丸の指揮官という経歴があり、第7回でも紹介したが順動丸は



坂本龍馬と自分
龍馬の等身大の人形。リアルな人形は龍馬ファン必見。



坂本龍馬、中岡慎太郎、藤吉の墓
京都の町並みを見渡せるところにある京都東山。両隣に中岡慎太郎、藤吉のお墓があり今でも龍馬を支えているに違いない。



新政府軍との戦いで自爆し最期を寺泊沖で終えた船である…。

今回は歴史を残し現代に語り継ぐROOTSが多くある京都に向かった。京都は、龍馬の墓で役を演じる事のお礼と役作りで毎年欠かさず行っているが、今回は幕末の歴史を詳しく知っている霊山歴史館副館長の木村幸比古氏に話を聞きに行ってきた。

まずは木村氏にお会いし霊山顕彰会の歴史や幕末偉人の話を聞かせてもらった。館内に入ると五千点を超える収蔵資料の展示があり、日本の歴史、文明開化、伝統、繁栄様々な出来事を感じられた。大人だけではなく子どもが歴史に興味を持ち学ぶ



寺田屋、龍馬の部屋
再建した寺田屋だがこの部屋の窓から色々な良き日本を想い日本の夜明けをイメージしていたんだろう。

事の第一歩としても訪れたい場所だと思った。
木村氏は説明中いつも笑顔でユーモアあるトークで僕に過去と現代を照らし合わせた歴史の一面を細かく説明してくれ、今も刻まれて行く歴史に入り込ませてくれた。

長岡人のROOTSには自分達を育て築き上げてきた精神「常在戦場」がある。発展、繁栄、敗戦、復興、様々な歴史が長岡を支えてきた。知らなければただの歴史に過ぎないが知った時に郷土の良さ、愛、誇り、精神が近代長岡の礎をつくり上げる大きな原動力になるのではないだろうか。

執筆：石丸 千也（いしまる かずや）
長岡で美容室を営み、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。

ペーカリー フクセンドー 長岡市東坂之上町2-5-8
TEL 0258-35-0088



互尊翁が愛した福泉堂のあんぱん(写真は現在販売されているもの)

文明開化の 味がする

福泉堂のパン

野本恭八郎は菜食主義者で粗衣粗食を貫いた。昭和十一年、八十五歳で没するまで、朝昼の食事は茶漬けか餅雑炊に一菜。茶は番茶。夕食は玄米飯と調和煮といわれる十種類ほどの野菜を醤油で煮たものを好み、十日に一度、塩鮭

などを付けた。

ところが案外、甘いものや珍しいものを好んだ。

当時、長岡には製氷会社があり、サイダー工場があった。夏になると野本はそのサイダーを愛飲。晩年には栄養価の高いチーズを食べ、牛乳は一日に三合を三回飲んでい

る。明治四十年、観光院町(現・東坂之上町)に福泉堂(フクセンドー)パン屋が開業した。創業者は銀座木村屋総本店で修行を積んだ渡辺政吉。木村屋のあんぱんは明治天皇と皇后に愛され、文明開化を代表する庶民の食べ物となった。野本はこの福泉堂のパンを取り寄せて終生「虫屑」にしていた。当時は洋食が流行り、「福泉堂のパン粉」も評判を呼んだという。

地域をつなぐ 先人の心

越後の上山藩分領と金子清邦

慶応二年(一八六六)に長岡市七日市(三島地域)に上山藩(カミのやま)校明新館の支館を開いたのは、上山藩士金子清邦である。古い物事にとらわれぬ経済感覚で藩政の刷新を行い、儉約と殖産を振興



三島地域 七日市の明新館支館跡



小国地域 山口庭園内の金子清邦の碑

七日市の大庄屋山田権左衛門や横沢の山口家、塚野山の長谷川家が領民とともに、殖産を振興しようとしていた。とりわけ大庄屋格であった山口家の子弟、野本恭八郎や兄の山口権三郎らの経済的な先見にも、金子の考え方が影響を与えたのではないか。勤皇の志士であった金子清邦は、朝廷を尊重しながら公武合体を図った。その金子の評判を聞いて、河井継之助が明新館支館を訪ねた。上山市では、ふるさとの先人金子清邦は長岡の河井継之助と並ぶ人物だと伝わる。

ROOTS
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう
平成30年は長岡開府400年

越後長岡ROOTS400 第10号 互尊思想
～長岡市民が創造した世界観

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成30年12月1日
編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 稲川明雄
牧野忠昌、石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10(開府400年記念事業推進室内)
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp
制作/株式会社ネオス
協力/(公財)日本互尊社 如是蔵博物館、(株)大坂屋書店、(株)新潟日報社
霊山歴史館、(公財)山口育英奨学会、長岡市立中央図書館
長岡市立中央図書館文書資料室、長岡市立科学博物館